

かつて、惑星ゼヘナの最強兵器として君臨していた者達がいた。

鋼鉄の機体からだを持った金属生命体——『機獣』だ。

機獣は自ら戦う意思を持ち、人間を搭乗者とし、共に戦場に在りあ続けてきた。

惑星ゼヘナの歴史は、人間と機獣による戦いの歴史と言っても過言ではなく、その関係は永遠だと思われていた。

しかし、人間と機獣の蜜月は唐突に終わりを告げた。

戦争がなくなり、機獣が不要になったからだ。戦いのない世界に兵器は必要ない。

やがて、多くの機獣は新たなエネルギー施設である〈ジェネレーター〉へと姿を変え、残りの機獣は眠りに就いた——いつか再び、自分達の存在が必要とされる日を夢見て。

かくして——その日は訪れた。

〈カストロ〉と呼ばれる敵性体から〈ジェネレーター〉を護り、消滅現象を未然に食い止めるための〈機獣少女システム〉——その中枢コアとなるために機獣は目覚めた。

〈ジェネレーター〉になる事を拒み、眠りに就く選択をした機獣の多くが、武勇伝や優秀な戦績を持っている。そういった個体だからこそ、〈機獣少女〉と共に戦場に立てる事に歓喜し、その存在意義を再び世に知らしめた。

恐らく私のパートナーの〈カグツチ〉も、機獣だった頃は勇名を轟かせていたのだろう。

『だろっ』というのは、〈カグツチ〉が自分に関する記憶を失っており、彼女に関する記録も同じく失われているため、確認のしようがないからだ。

〈カグツチ〉自身がそれを気にしておらず、私も特に詮索するつもりはないため気にしていなかったが、彼女の素性については噂があった。

それは確証も裏付けもなく、噂の域を出ないものだったが、私はその可能性を目の当たりにする事となった。

不可思議な能力と、圧倒的な闘争本能。

その戦い方は、噂されている伝説的な機獣を彷彿ほうふつとさせるものだったから……。

サイドストーリー #06

『キョウシュウキ』

〈カタストロ〉対策を始めて三日目の夜の公園。そこに現れたのは、やみひめさんの知り合いだった。見た目通りなら高校生くらいに見える女性だが、やみひめさんが『クラウド』と呼んでいた事から、ごく親しい間柄なのだと思う。

その女性——クラウドさんが突如、漆黒のドレスに衣装を変え、獣の爪を思わせる手甲を武器に襲いかかってきた。

〈機獣少女〉を思わせるその姿は、〈カグツチ〉曰く、クラウドさんに取り付いた〈カタストロ〉によるものらしい。〈カタストロ〉が〈機獣少女〉に関するデータを持っている事自体に疑問はない。ただ、過去にこれと類似した現象の報告はない。

もつとも、〈カタストロ〉に関して判っている事など、皆無に等しい。

そして、ここが惑星ゼヘナでない以上、どんな変化が〈カタストロ〉に起きても不思議はない。

やみひめさんは、やむなくMBジャケットを装着し、〈カグツチ〉に身体からだのコントロールを預け、クラウドさんとの戦闘を開始した。戦況は一度はやみひめさん達の優勢に傾いたが、クラウドさんの背中に『機械の羽根』が生えた直後、私は絶望的な光景を見る事になった。

「う、ぐ、あ……ぎいああああああああああああああああ——ッ!」

その痛々しい叫びは、思わず耳を塞ぎ、目を背けたくなるものだった。

クラウドさんの圧倒的な運動性能に翻弄ほんろうされつつも、やみひめさん達は彼女の攻撃に对应した——出来たと思った。だが、クラウドさんの手甲の爪の間から生成された光の剣——恐らく近接戦闘用光学兵器だろう——により、攻撃の有効範囲リーチが変わったため、左肩を無惨に串刺しにされてしまった。

普通ならショックから精神を守るため、失神していてもおかしくない痛みだったと思う。だが、MBジャケットはそれを許さない。装着者の痛みを麻痺まひさせるための特殊な麻酔の投薬と、意識を保つための電気ショックにより、装着者の意識を強制的に覚醒させる。戦場で意識を失う事は死を意味する。

だから、精神と肉体に無理を強いても、〈機獣少女〉は死ぬまで倒れる事を許されない。人道的な見地から、この機能を非難する意見もあるが、当事者である〈機獣少女〉からの不満の声は少ない。

どんなにつらくても、死ぬよりはマシだから……。

だが、それは戦場に身を置く覚悟をしている者の理論だ。つい数日前まで普通の少女だったやみひめさんが、日常生活では絶対に感じ得ない痛みいたみに、正気を保てるとは思えない。

「ぐう………あああああッ！」

自分を奮い立たせるように雄叫びを上げ、やみひめさん達が右手に持った〈カグツチ〉を振り上げる。

しかし、その動きは緩慢で、あつさりとクラウさんに対応されてしまう。左手の手甲からもレーザー・ブレードを生成すると、クラウさんは攻撃と呼ぶには無造作な動きで、それをやみひめさん達の右肩に突き刺した。

再び悲痛な叫びが夜の静寂を掻き消す。

やみひめさん達は唯一の武装である〈カグツチ〉を地面に落とし、その場で脱力した。

倒れようにも、両肩を串刺しにされているため出来ず、MBジャケットの機能により、失神する事も出来ない。

それは生き地獄だ。

やがて、戦意を喪失したやみひめさん達に興味を失ったように、クラウさんがレーザー・ブレードを消失させた。両肩の傷口から出血がないのも、MBジャケットの止血機能によるものだ。失血は体力を奪い、やがて死に至るから。

オレンジ色の光の剣が消えると、解放されたやみひめさんは地面に膝立ちになり、頭と両腕をだらりと下げた。

その姿は、処刑人に赦しを乞う罪人のようで痛々しい。

もう、やみひめさん達——少なくとも、やみひめさんに戦う意思はないだろう。戦意も気力もなく、心が折れてしまっているはずだ。

早く死んで楽になった方がいい——そう思ってしまったても仕方がない。

それを責める権利は誰にもない。

誰にだってありはしない。

ここまで戦ってくれた少女を責める者がいたなら、それは私が許さない。

「――」

項垂れているやみひめさん達を見ていたクラウさんが、おもむろに右手の手甲を構えた。トドメを刺すつもりだろう。

私は、地面に落ちた〈カグツチ〉までの距離と、それを拾ってクラウさんに斬りかかるまでの時間を計算した。〈カグツチ〉の意識は今はやみひめさんの中なので、私がMBデバイスを手にしても、MBジャケットを装着出来る可能性は低い。そもそも、この星の大気組成と不適合な私では、万に一つも勝ち目はないだろう。

それでも、このまま彼女等だけを死なせる訳にはいかない。

私を認めてくれたパートナーと、私を助けてくれた恩人——彼女等に報いず、のうのと生き残るような恥知らずになるくらいなら、いつそ死んだ方がいい。

そう決意して、私が物陰から飛び出そうとした時——変化が起きた。

具体的に何かの現象が発生した訳ではない。光ったとか、音がしたとか、そういう変化ではない。

だが、膝立ちになったやみひめさん達の身体からだから、『威圧感』プレッシャーのような何か周囲に撒き散らされている。

それは指向性がなく、自分以外のすべてを威圧しているようで、私は身が竦すくんで動けなくなった。

「機獣少女」として、幾度も〈カタストロ〉を殲滅してきた私ですら戦慄せんりつした。

恐らく、クラウさんも同様の威圧感を覚えたのだろう。攻撃の構えを解き、後ろに跳躍して距離を取った。

味方の私ですら恐怖を感じる嫌な威圧感が公園全体に広まっていく。

やがて、やみひめさん達がゆらりと立ち上がった。私の位置からは背中しか見えないため、どんな表情をしているかは判らない。

「……………その威あつを示せ——」

呟ささくような声音。

微かすかに聞き取れたやみひめさん達の声は、確かにそう聞こえた。

その言葉の意味を考える間もなく、やみひめさん達に更なる変化が起きた。和服のよう

な黒いMBジャケットの各所に、血管のような紅あかいラインが走った。それは淡く発光し、闇夜に不気味な存在感を主張している。

変化はもう一つあった。

背中から生えている、刃を思わせる鋭角的なデザインの黒い羽根だ。

それが左右合わせて六枚。

「やみひめさん……?」

訳が判らなくなり、私は思わず独りごちた。

MBジャケットは装着者によってデザインの変更は出来るが、それはあくまで見た目ビジュアルだけだ。

しかし、眼前のやみひめさんのMBジャケットの変化は、機能面にも影響を与えている

ように見える。少なくとも、虚仮威しのハッターとは思えない。

やみひめさん達が右手を水平に上げた。すると、地面に落ちていた〈カグツチ〉がふわりと浮き上がり、その手に収まるべく飛翔した。勢いよく主の元に戻ってきた機剣を掴み、勢いを殺すように一度振るい、左手を添えた。

正眼の構えた。

一瞬、六枚の羽根が振動すると、MBジャケットに走った紅いラインの光を残し、やみひめさん達の姿が消えた。

いや、正確に言えば、消えた気がただけだ。『機械の羽根』を生やしたクラウドさんが見せた爆発的な超加速と同じく、速すぎて目で追えなかっただけ。

——キィイーン！

硬質な物体同士がぶつかり合った時特有の嫌な音が響く。音のした方向に目を向けると、やみひめさん達の攻撃を、クラウドさんが両手の手甲を交差させて受け止めていた。両手でなければ受け止めきれないと判断したのだろう。実際、クラウドさんの両足がわずかに地面を抉っていて、受け止めている両腕も小刻みに震えている。

やみひめさん達の一撃は、それほどの威力だという事だ。

その体勢のまま、身体ごと〈カグツチ〉を押し込むようにして、やみひめさん達はクラウドさんを追い詰めていく。

やがて圧力に耐えかね、クラウドさんの手甲の爪が砕けた。

するとクラウドさんは手甲からレーザー・ブレードを生成すると、今度はそれを投げナイフのように撃ち出した。発生器から離れても、しばらくは状態を維持出来るのだろう。撃ち出されたレーザーの刃は、簡単にやみひめさん達に叩き落とされたが、新たにレーザー・ブレードを生成すると、続けざまにそれを撃ち続ける。両手の手甲から撃ち出されるレーザーの刃は、エネルギーが無尽蔵であるかのように生成され続ける。

二つの手甲と一本の剣。

武器の数が多い方が戦闘に有利かと問われれば、答えは否だ。武器が多くて、結局のところ、使いこなせなければ意味はない。二刀流や二拳銃というのがあるが、よほどの才能があるか、訓練をしなければ、左右のどちらかは持て余す。であれば、一つに集中した方がいい。

しかし、使いこなせるのであれば、武器は多い方が手数が増やせる。

畢竟、二つの手甲から絶えずレーザー・ブレードを撃ち出せるクラウドさんが、〈カ

グツチ〕一本でそれに対処しなければならないやみひめさん達より、手数で有利だ。

では、どうすればいい？

答えは簡単だ——こちらでも得物を増やせばいい。

「——模倣せよ」
エミユレート

やみひめさん達が言葉を発すると、彼女等の周りに〈カグツチ〉と同じデザインの機剣が無数に出現していた。まるで最初からそこにあつたように。

両手持ちしていた〈カグツチ〉を左手のみで握り、撃ち出されるレーザー・ブレードを片手で迎撃しつつ、空いた右手で周囲に出現した〈カグツチ〉と見た目の上では変わらない機剣を一本掴む。

そして、やみひめさん達はそれをクラウさんに向けて——投擲した。

「——ッ!？」

ずっと無表情だったクラウさんが、二度目の戸惑いを表情に浮かべた。空気を切り裂く音が聞こえそうなほどの速さで飛んでくる機剣を目の当たりにすれば、無理はない。

咄嗟に回避は不可能と判断したのだろう。クラウさんは右手の手甲で機剣を叩き落としたが、その衝撃で、爪が砕けていた手甲は完全に使い物にならない状態となった。

間髪入れず、もう一本、機剣が飛んでくる。残った左手の手甲で防ぎ、結果、クラウさんは両手の装備を失った。

「オンリコン・ス・ト——」

「黙るがよい」

クラウさんが、件の手甲を再生させる言葉を言い終わる前に、やみひめさん達が彼女の口を手で塞いでいた。だがそれは、単純に手のひらを添えているのではなく、プロレス技で言うところのアイアンクロード。口を塞ぐのはついでで、相手の顔ごと握りつぶそうという意図がありありと伝わってくる。

「ぐ……があ……ッ!」

クラウさんは苦悶の声を上げ、自分の顔を固定しているやみひめさん達の右腕を両手で掴み、引き剥がそうとする——が、びくともしない。

やみひめさん達は信じられない事に、クラウさんの顔をホールドしたまま腕を持ち上げ、地面から離れた両足をばたつかせる彼女を放り投げた。

MBジャケットにより身体能力が強化されているとはいえ、ありえない膂力だ。

放り投げられたクラウさんは、公園内の樹木に叩きつけられ、地面に落下する前に磔にされた。先ほどやみひめさん達が出現させた機剣が二本投擲され、それらに両肩を串刺しにされていた。

奇しくもクラウドさんが磔くにされているのは、先ほど彼女がローリングソバットで叩きつけられた樹木だった。両肩を串刺しにしたのは、やみひめさん達の意趣返しなのかもしれない。この発想は（カグツチ）らしいが、今はどちらが身体からだをコントロールしているのか判らない。

やみひめさんなら、こんな残酷まねな真似はしないだろう。かといって、（カグツチ）にもそれなりの倫理観はある。それは、パートナーである私がよく知っている。

では……あのやみひめさんは誰だ？

私が豹変してしまったやみひめさん達に困惑していると、彼女等はゆつくりとした足取りでクラウドさんの眼前に到達していた。

「……………オンリコ——」

「黙れと言ったぞ」

件の言葉くだんを最後まで言わず、やみひめさん達は残りの機剣をクラウドさんの太ももに突き刺した。

「があああ……！」

『今度はお前が悲鳴を上げる番だ』——そう言わんばかりに、やみひめさん達は突き刺したばかりの機剣を左に捻ねじった。無慈悲な仕打ちに、またもクラウドさんが苦悶の声を上げる。

「ぐ……………がああああああああああああああああああ——ッ！」

文字通りの、手負いの獣のような咆哮を上げ、クラウドさんが『機械の羽根』を稼働させようとする。上下に展開し、内部の刃のようなフィンが顔を見せ……しかし、そこまでだった。

「悪足掻あがきを」

吐き捨てるようにやみひめさん達が言うと、残りの機剣がすべてクラウドさんの『機械の羽根』に殺到し、無惨にそれを串刺しにした。

『機械の羽根』は機能を停止し、クラウドさん自身も身動きみじろ一つしなくなった。その姿は、ピンで留められた巨大な昆虫の標本のように見えた。

「さて——そろそろ仕舞しまいにするか」

動かなくなったクラウドさんに興味を失ったのか、オリジナルの（カグツチ）を右手に持ち替えると、その切っ先を彼女の心臓に向けた。

それは——駄目だ！

「やめてください！ それ以上は、クラウドさんが死んでしまいます！」

私は今度こそ物陰から飛び出すと、やみひめさん達の元へ駆け出した。だが、もう一歩で手の届く距離まで来たところで〈カグツチ〉を向けられ、私は立ち止まった。

「なんだ、其方は？」

私に向けられたその言葉は、可能性としては想定していた。それでも、ごく親しい相手から、赤の他人のように言われるのはつらいものがある。

そして、口調こそ〈カグツチ〉だが、目の前の彼女は明らかに別人だ。私の事が判らない以上、やみひめさんでもない。

「……それは私の台詞です」

「なに？」

無害な子供を見るようだった彼女の表情に、警戒の色が混じった。

「あなたは誰ですか？ その身体は、私の恩人のものです。その身に宿っているのは、私のパートナーの意識です。でも、あなたはどちらでもない」

「ほう。その歳にしては気丈な娘だ」

「誤魔化さないでください」

「ふむ。実は私も状況がよく飲み込めておらなんだ。後ほど話を聞きたい故、少し待っておれ」

そう言って、彼女は私に背を向けた。私に対する警戒は消え、興味に変わったようだ。

だが、黙って見送る訳にはいかない。〈カグツチ〉の切っ先が私から、最初の相手に戻ってしまったのだから。

「待ってください！ その人は、私の恩人の大事な人なんです」

「それは、この身体の持ち主の事か？」

「はい」

「なるほどな。しかし、私は彼奴を八つ裂きにしたくて仕方がない。覚えはないが、大層な煮え湯を飲まされた気がするのだな」

そう言う彼女に、私は薄ら寒いものを感じた。

私の恩人の優しい表情ではない。

私のパートナーの気高い雰囲気もない。

私の大事な人達の顔と口調で、そんな表情をして、そんな言葉を吐かないでほしい。

それは彼女等への冒瀆だ。

「……なんのつもりだ？」

正面に回り、クラウドさんを背にする私に向け、彼女は不思議そうに言った。

「させません」

「どくがよい。巻き込んでしまうぞ？」

「どきません。クラウさんを殺してしまえば、あなたは元の生活に戻れなくなる」
ただでさえ、やみひめさんには迷惑を掛けてしまっている。これ以上の重荷を背負わせられない。こんな、取り返しのつかない罪を犯させる訳にはいかない。

「……警告はしたぞ」

彼女の言葉は冷めきっていた。私に対する興味より、邪魔だという気持ちの方が勝つたのだらう。きつと、構えた〈カグツチ〉で、私ごとクラウさんを殺す事に躊躇はない。

私は睨みつけるように彼女から視線を逸らさなかった。

本当は目を瞑ってしまいたかった。

怖くて仕方なかった。

だけど——私は〈機獣少女〉だから。

最後まで、やみひめさんと〈カグツチ〉に誇れる自分でいたかったから。

「ではな——」

彼女の感情のこもらない離別の言葉。

これが最後に聞く言葉だと思つと泣けてくる。

だが、次に来るであろう〈カグツチ〉の刃が、私の身を切り裂く事はなかった。

突如、背後で異変が起こったからだ。

「くっ……まだ足掻くか！」

彼女が悪態を吐く。

何事かと振り返れば、樹木に磔はりつけにされていたクラウさんの『機械の羽根』が背中から切り離され、両肩と太ももを串刺しにしていた機剣はすでに抜かれていた。つまり、すでにクラウさんは動けない標本ではない。

「がああああああああああああああああああああああああああああ——ッ！」

クラウさんが私を標的にしたのは、きつと距離が近かったからで、それ以上の理由はなかったと思う。咆哮を上げ、自前の手甲でなく、自分を串刺しにした機剣を私に振り降ろす。

しかし——

「……………どうして？」

クラウさんに刺されたのは私ではなかった。

私は、私を庇ってくれた彼女の背中を呆然と見つめた。彼女は私を護るように背にし、左手でクラウさんを牽制するように〈カグツチ〉の切っ先を向けている。右手じゃないの

は、私を助ける際に右肩に傷を負ったためだ。

クラウさんと彼女はしばらく睨み合っていたが、その間に冷静になったのか、クラウさんはあっさり撤退した。

手負いの彼女に勝てるかもしれない。だが、自分もかなり消耗している。ならば、ここで勝負に出るべきではないと判断したのかもしれない。

先ほどは逆上していたために優先順位を見失っていたが、本来は冷静な状況判断が出来るのだろう。それがクラウさんなのか、彼女に取り付いた〈カタストロ〉による判断なのかは、私には判らないが。

だが、今はそれどころではない。クラウさんを逃がしてしまった事も問題だが、まずは――
「……大丈夫ですか？ どうして、私を？」

まだ私に背を向けたままの彼女に呼び掛ける。肩の傷は浅いようだが、それでも凶器によるものだ。平気なはずがない。

私の声に、彼女が振り返る。

しかし、それは予想していたものとは何もかもが違っていた。

「良かった。ツバキが怪我^{けが}しなくて……」

それは私のよく知る恩人の優しい表情で、私を気遣ってくれる優しい口調だった。

「やみひめ……さん？」

訳が判らなくなつて、思考が上手く働かない。ただ、目の前の彼女はやみひめさんのようで、私はそれがどうしようもなく嬉しくて。だけど、そんな気分は長続きしない。

意識を取り戻したと思われたやみひめさんは、力尽きたように、その場に倒れ伏してしまつたから。

人気のない夜の公園とはいえ、相当の被害を出してしまつた。そろそろ人が集まつてきてもおかしくない。だが、やみひめさんは元の姿に戻らずに気を失っている。私の体格では、どうしたって運べない。なにより、この状態ではやみひめさんの家にも帰れない。この両親に説明のしようがない。

もういつそ、パニック状態になつてしまつたかった。

けど、そんな現実逃避は出来ない。せつかく拾つた――いや、救われた命だ。自暴自棄になる訳にはいかない。

諦^{あきら}めるのは、やれる事をすべてやってからにすべきだと思うから。

あとがき

どうも、るとおめさ流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』サイドストーリー#06をお届け致します。

#05に引き続き、ツバキ視点です。サイドストーリーと言いつつも、今回は実質、本編・第十一話の続きです。こうしないと、やみ子の初陣がそうだったように、主人公の意識がない場面は本編では書けないんですもの。これが一人称小説のやっかいなところですよ。

そういう理由で、今回はツバキ視点を利用して、やみ子の意識のない間に起こった出来事を書きました。

こうして書いていて思うのは、『仮面ライダー』のように基本一人で戦うヒーローは孤独で、見守るしか出来ないキャラはこんなにも無力感に苛さいなまれているのか——という事です。(機獣少女)はまだMBデバイスという相棒がいるからいいようなものですが、そうじゃないと、独り言のオンパレードになるのも仕方ない……リアル系ロボットアニメ全般に言える事です。

では、よきところで謝辞を。

「ここまで読んでくださった『あなた』と、チェックしてくださった紙白さんに感謝を。ありがとうございます。

バトル展開は、とりあえずここまでです。次のバトルはクライマックスの最終決戦ですね。それまでに『バトル書きたいゲージ』を溜めておきます。今はエンディングなので。バトル書くの、しんどいっすわ……。いや、楽しくはあるんですが。

2015/9/23 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイヤミカルやみひめ The NOVEL XXXXXX』小説ページに戻る